

名古屋大学医学部・医学系研究科外部評価委員会

－外部評価書（全体総括）－

東京大学大学院医学系研究科 教授
宮 園 浩 平

1 総合評価

名古屋大学医学部・医学系研究科外部評価委員会が平成 25 年 8 月 21 日に名古屋大学医学部附属病院中央診療棟特別会議室にて開催された。名古屋大学医学部では平成 19 年に助言者会議を開催し、外部有識者から貴重な助言を得た。前回の助言者会議から 5 年目にあたる本年、医学部・医学系研究科が外部評価委員会を開催し、教育・研究・診療の現状を把握し、今後の発展に役立てようとする姿勢に敬意を表したい。名古屋大学医学部・医学系研究科が教育・研究・診療のそれぞれの分野で特徴のある、高い水準の活動を行っていることが確認され、「学部教育」、「大学院教育」、「研究」、「診療」、「業務運営」のそれぞれにおいて高い評価が得られた。一方で、今後の更なる発展のためにいくつかの改善点が指摘されたことから、これらの点については委員会として助言を行うこととする。

2 個別の項目に関する評価

(1) 医学部の教育と入試選抜体制・その特徴

医学部の教育においては名古屋大学医学部では全体として研究者の育成に力点をおいたカリキュラム構成となっていることが特徴である。特に 3 年生後期全期間・全日（半年）にわたって学生を基礎医学系・社会医学系の講座に配属させて研究活動を経験させ、終了後は発表会を開催していることは大きな特徴である。研究志向の学生の育成は、これを実施する教員サイドの負担はかなり大きいと考えられるが、教員が一丸となって取り組んでいることが伺われた。学生の研究マインドの育成に関しては他大学との共同のリトリートなどを行っているが、その効果を今後評価して行く必要がある。また、地域医療教育や海外提携校での研修にも力を入れるなど、特徴あるプログラムが実施されており、教員側の努力が伺われた。

入試については、推薦、前期、後期、3 年時編入の 4 種類の選抜方法が採られており、それぞれがアドミッションポリシーに沿って研究志向の学生、地域医療に資する医師の育成など多様な人材の確保に務めている。平成 25 年度より前期入試に面接を導入した結果、名古屋大学医学部は全ての選抜方法で面接を施行していることとなり、望ましいことと評価する。

(2) 学部教育の今後の改善・将来展望

学部教育カリキュラムには細やかな工夫をしていることが伺われた。3 年時編入者に対してはカリキュラムが過密ではないかとの指摘があったことから、今後もフォローしながら、必要であれば適切な改善を行うよう留意していただきたい。

地域医療に従事する医師は後期入試で確保しているが、ドロップアウトを出さない指導体制と学生のキャリアパスについては、関係者と継続して連絡を取りながら対応して行くことが重要と考えられた。

海外実習支援については、5年生を対象に希望者を募集して、面接などによる選考を行い、十分な準備教育を行った上で約3ヶ月の海外臨床実習へ派遣している。海外臨床実習は外部からの注目度も高く、これまでの実績に基づき更なる発展が期待される。

クリニカルシミュレーションセンターは平成25年度よりスタートしたが、臨床医学に必要な最新技術を習得できる画期的なシステムであり、今後の更なる充実を期待したい。

（3）大学院教育の実施体制と特徴

大学院は従来の4専攻を拡充・再編し、平成25年度から新たに3領域からなる総合医学専攻を導入した。博士課程（入学定員161名）は研究科の方針としてプレマチュアな研究で満足せず、よりインパクトの高い研究論文に仕上げて学位を授与するという強い姿勢が見られることが大きな特徴である。このため博士課程修了時までの学位授与率が40%台と低くなっているが、優れた研究を完遂させる研究者を養成するという見識を高く評価したい。大学院生は平成16年～23年の8年間で1,940報の論文と4,790報の学会発表、76件の受賞を受けており、優れた研究成果として高く評価される。

修士課程は医科学専攻（入学定員20名）と医療行政学コース Young Leaders' Program (YLP)（入学定員10名）から構成されている。医科学専攻はモチベーションの高い学生の確保に苦勞している様子が伺えるが、優秀な研究者に成長した人材も見られることは評価される。YLPは極めて特徴のある名古屋大学独自の課程で、アジア諸国をはじめとした世界各国の医療行政指導者の育成に大きく貢献していることが伺え、高く評価された。

（4）大学院教育の改善点・将来展望

博士課程の共通（基礎）科目では最先端医学研究の紹介と実験手技のトレーニングを実施している。これらの教育科目はよく考え準備されていることが伺え、十分な回数が開講されていることが確認できた。講義の英語化は平成21年度に取り入れられたが、平成24年度においても英語化率が30%台である点は国際化が進む今日としては物足りなく、さらなる努力が望まれる。

博士課程では医学部卒の学生の博士課程入学が卒後8年時にピークになっており、入学年齢の高齢化が問題となっている。優秀な学生が早期から研究を経験することは重要であり、その解決策として名古屋大学ではMD・PhDコース、卒直後コース、基礎医学研究者養成コース、次世代医学者研究者養成コースを設け、学生に経済的なサポートを行うなどの努力を行っていることは評価したい。これらのコースの効果の評価はもう少し時間を必要とすると思われ、今後の進展を見守って行くべきであろう。これらのコースが総合的に機能してより多くの優秀な研究者が育成されることを期待したい。

修士課程（医科学専攻）は原則として博士課程に進学することを前提として教育を行っているが、博士課程への進学率が3分の1に留まっている点は今後検討の必要があろう。こうした医科学修士課程の抱える問題点は、薬学部が6年教育となったこともあっ

て他大学でも共通の問題となっている。今後は効率的で特徴的な教育制度の導入を含めて、医科学専攻のあり方について検討して行く必要がある。

（5）研究活動の状況と特徴

名古屋大学医学部・医学系研究科の研究水準は全体として高く、組織改革を行いつつ着実に実績を積み上げてきた。平成 19 年に行われた助言者会議の指摘をふまえて、名古屋大学医学部・医学系研究科では神経・腫瘍研究に重点を置き、両者の融合、臨床試験の充実を目指してきた。平成 24 年度より神経疾患・腫瘍分子医学研究センターを組織改編・整備したことは外部からもわかり易い。こうした努力により、多額の外部資金を獲得し、優れた研究成果を継続してあげている点は高く評価できる。

研究科全体の研究基盤となる医学教育研究支援センターにおいては、分析機器部門の充実に力を入れ、専属の常勤技術職員を 5 名配属し、機器の保守や管理に努めて来た点が評価される。一方で研究の技術の進歩は速いことから十分に対応できるような体制作りが重要である。先端医療・臨床研究支援センターでは次世代シーケンサーを含めて最新機器の購入を計画しているとのことで、今後も高速度のゲノム解析に対応可能な体制を作ることが望まれる。

（6）研究における人材育成・社会貢献と研究の将来展望

人材育成に関しては名古屋大学としてテニユアトラック（TT）制を取り入れており、医学系研究科でも TT 終了後 4 名がテニユア職を獲得するなど、人材育成に積極的に取り組む姿勢が見られる。若手研究者育成においても文科省の支援などにより積極的に取り組んでいることが伺われる。今後は独自の財源で TT 制を維持できる体制作りが重要であろう。

研究面での社会貢献としては特許登録件数が平成 20 年度以降継続的に増加し、バイオ系シーズの説明会を開催、研究成果のプレスリリースも平成 23 年度以降急増しており、研究成果の社会への還元に対する取り組みが伺われる。今後さらに産学官連携に関する研究者の意識向上が重要な課題であろう。

個々の研究活動では質の高い成果が継続して発表されており、外部資金の獲得も順調である。神経疾患と腫瘍の統合的研究は名古屋大学の特徴として今後発展することが期待される。その成果を基盤に疾患の診断や治療に展開することが今後の課題となろう。またグローバル COE プログラムが終了したことから、今後の拠点形成の方向性を明らかにすることが急務である。近年の運営交付金の削減に伴い、特に基礎医学部門の教員数の確保は重要な問題となってくると予想される。研究科長・執行部を中心に、研究活動をさらに充実・発展させるための継続した努力を期待したい。

（7）医学部附属病院における診療の現状と特徴・将来展望

医学部附属病院では医療安全、高水準の医療提供、優れた医療人の育成、次世代を担う医療の構築、地域と社会への貢献を目標として診療活動に取り組んでいる。

医療安全に専従する副院長を中心として高水準医療を可能にする医療の安全確保に努めている。また中央感染制御部の専任教授を中心とした感染対策チームの活動や、高度治療・急性期医療部門の再編と SICU、EMICU の設置などの新たな試みを評価したい。

優れた医療人の育成のために総合医学教育センターの機能を充実し、生涯教育を一元的に管理している。文科省の支援による東海若手医師キャリア支援プログラムによるキャリア支援活動が行われ、成果をあげていることが伺われる。またがんプロフェッショナル養成プランによるがんの研究・診療に関わる医療人の養成や国際化をめざした海外病院視察や人材交流などの取組が行われている。

次世代を担う医療の構築のために先端医療・臨床研究支援センターが開設され、シーズ発掘、研究支援が行われている。本事業は名古屋大学を中心として中部地区に広げられ、先端医療開発や人材育成を行っている。臨床研究審査においてはホームページ公開などを積極的に行っており、透明性の確保が評価できる。

地域と社会の貢献に関しては名大病院に毎年 300 名近い入局者を受け入れており、地域医療を担う人材育成のために継続した努力を行っている。多くの関連病院を有しており、地域での連携・医師派遣によってその責務を果たしていると言えよう。地域がん診療、小児がん診療では拠点病院としての活動が期待されており、また平成 25 年 11 月に竣工予定のドナルド・マクドナルド・ハウスは病気の子供とその家族が利用できる潜在施設として活動を行う。今後は我が国の国際化に伴い、附属病院の国際化が期待されよう。

（8）業務運営の実態と将来展望

病院の経営指標である診療報酬は 5 年間で急速に増加しており、経営が改善している。入院稼働率の上昇、平均在院日数の減少など多くの要因が考えられるが、人材確保への投資などが積極的に行われ、職員のモチベーションの向上も大きな要素となっていることを評価したい。

組織運営については補佐会議を発足し、重要事項の意思決定を迅速かつ積極的に行っていることが伺われる。医学部、病院関連施設の有効活用を促進し、自己点検・評価を効率的に行った。また情報公開や情報発信などを推進し、さらに施設・設備の整備、安全管理、ハラスメントや研究倫理に関する法令遵守にも積極的に取り組んだことが伺われるが、社会への透明性の確保のためにも今後もいっそうの努力を続けて行くことを期待したい。

(所 属) 東京大学大学院医学系研究科

(氏 名)

宮園 浩平